

【論文要旨】

学位論文題目：「葉石濤作品における文学観の実践」

氏名：迫田博子

本論文は、台湾戦後第一世代作家・葉石濤（1925～2008）の小説作品を対象とし、作家が標榜する文学観に着目しつつ、その文学観をどのように創作に実践、反映しているかを説明することを課題と定める。それにより、葉石濤作品の文学表象の具体像を把握し、作品の意義を再度見いだすことを目的とする。葉石濤の文学観は、フランスの哲学者のイポリット・テーヌ（1828～1893）から影響を受けたものとされ、すなわち、文学作品を生み出す三大基本法則とは「種族、風土（自然環境と社会構造）、歴史」と説く。葉石濤文学を理解するうえで、三大要素はひとつの鍵であるといっても過言ではないだろう。なぜならば葉は半世紀以上にわたる文学活動の中で、台湾にまつわる「種族、風土、歴史」を積極的に作品中に描出しており、自らの文学観で意識し続けてきた視座を作品の基底に据えていると思われるからだ。また、葉石濤作品の特色は三要素を小説の主題としている点だけでなく、それらを作品の中でどのように練成し、表現されていたのか、ということにも潜んでいると考えられる。

以下に各章ごとの要旨を示す。第一章では、導入部分として葉の小説創作活動を通観したうえで、葉におけるテーヌ理論の受容のあり方を中心に論じた。葉の文学観は総じてテーヌの学説とほぼ同じ方向性を志向しているが、「種族」や「歴史」に関する解釈には若干の相異がみられる。また、葉はテーヌ理論をフレームワークとして借用する一方、台湾の「種族、風土、歴史」に関する諸事象を枠組みの中にあてはめ、置きかえる作業を行っていることを指摘した。第二章では、二・二八事件と白色テロ時代を背景とし、作家の実体験が投影されている『台湾男子簡阿淘』の作品分析を行った。作中、二種の喪失体験が叙述されているが、それらは人間世界の不条理性や不安定さをも表出している。「個」の物語であるはずの本小説は歴史や世代記憶を映し出し、かつ台湾の人々に共有される普遍性を内包する。第三章では、日本植民地時代を描いた「獄中記」を取りあげ、作品の日本表象に焦点をあてながら検討を加えた。とりわけ日本の地名と古典和歌に注目したが、日本の地名・場所は登場人物の記憶を再現する装置としての機能を有する。また、『万葉集』の和歌を引用することによって、主人公の精神性のアンビバレントな特徴を浮き彫りにしている。小説世界内で表象された「日本」は輻輳的であり、日本表象により植民地時代の歴史記憶が重層的に可視化された。さらに、主人公の造形により三要素が浮かび上がるよう構

成されていることを指摘した。

第四章では、エスニシティを主軸に展開する『西拉雅末裔潘銀花』について考察した。従前、本小説は家父長制社会の漢族と対峙する母系社会の先住民族、という二元論を切り口として論じられることが多い。本稿では、シラヤ族を出自にもつ主人公の価値観を再考し、また、彼女とかかわった五人の漢人男性の「男性性」に着目する概念を導入することにより、二項対立以外の観点で本小説を捉えなおす可能性を提示したのである。文中、エスニック・グループ間の言語や文化、思考様式等に関する記述を散見するが、台湾社会の多様性を呈示する為だと考えられる。第五章においては、ブラックユーモア小説と位置づけられてきた「晴天和陰天」を取りあげ、小説世界に流露する「笑い」と「かなしみ」の二つの側面から考察を加えた。「笑い」を誘発する要因として誇張と風刺、アイロニーなどの技法が用いられており、他方、「かなしみ」は幼女の夭折という悲劇によって提示されているのである。さらに、作品の根底には「困難な生をいかに生きるべきか」という主題が伏流していることと、小説世界を点綴する濃厚な風土性について論じた。

以上の論議を経て、葉石濤作品における文学観の実践方法の特色を総括すると次のように説明できる。第一に、「種族」は主に独自の文化や言語等の側面に光をあてながら叙述するが、その際、作家は互いの相異を優劣ではなく、相対的に見てゆくスタンスをとられている。第二に、「風土」は自然環境よりも社会構造について多く述べられ、また、風土によって培われた気風や内面の描写に重点を置く。第三に、「歴史」では個別の表象に歴史を投影する手法を多用した。葉石濤は、みずからの小説作品の素材を台湾固有の歴史や社会情勢などに求め、台湾の市井に生きる人々の哀歓を凝視し、叙述してきた。台湾をめぐる思索や問題意識を提示してきた証左だといえよう。一方で人間世界や生のはらむ不条理性など、人類が抱える根源的な不安といった問題をも述べられている。さらには作品を通して示された、多様性と寛容の精神を重んじる社会への提案は、分断が進む今日の世界に何らのサジェスションを与えると考えるのである。